

## 第4回館長講座 『モースの影響』

司会：定刻となりましたので、第4回の『館長講座』を始めさせていただきます。

今日は、ようこそお出でいただきました。本日は「モースの影響」と題しまして、鷹野館長よりお話をいただきます。それでは、よろしくお願ひします。

(拍手)

館長：皆さん、こんにちは。雨の中、ありがとうございました。

前回、エドワード・モースの大森貝塚の発掘についてお話しいたしましたが、そのモースがどんな影響を残したのか、あるいはモースと同じ時代に活躍していた外国人たちがどうだったのかということから、お話をさせていただきます。

まず、モースが大森貝塚を発掘したわけですけれども、モースの弟子の佐々木忠次郎と飯島魁いいじまいさおの二人が中心になりました、茨城県の陸平貝塚、これは「おかだいら」と読みますが、を発掘します。モースの大森貝塚の発掘を範にして、日本人だけで試みたわけです。

明治12年のことですが、その発掘の成果を、大森貝塚の“SHELL MOUNDS OF OMORI”にかけまして、“OKADAIRA SHELL MOUND AT HITACHI”という題名の報告書を出しています。

大森貝塚の報告書が東京大学の理学部の紀要という形だったのですけれども、その附編ふへんということで、こちらは英文だけで出版されました。大森貝塚のほうは『大森介墟古物篇』という日本語版が出されたのですが、こちらは英語だけです。

しかしながら、まだまだ考古学という学問が根付いていない時代でもありましたし、報告書の体裁から何から、全く大森貝塚の物まねと言ったら言い過ぎかもしれません、まねをして作ったものでした。

レジュメに写真がありますが、左側の人が佐々木忠次郎で、右側が飯島魁です。佐々木忠次郎は、後に昆虫学のほうに進みまして、飯島魁のほうも動物学に進み、海綿とか寄生虫、鳥などの研究を行い、それぞれの分野で名を成した人になっていきます。

二人の写真の右側は、陸平貝塚の報告書に付けられた土器の図ですが、大森貝塚の報告書に付けられた図は、きちんとコンパス、ディバイダーによって土器の長さなり大きさを測って、それを図にするということをしていますが、こちらはご覧のとおり写真のようなもので、きちんと計測をして、その計測の結果を図にするというような方法は、必ずしも取られなかったようです。

これは現在の陸平貝塚ですが、場所は茨城県の霞ヶ浦の南岸にあります。このレジュメの写真はインターネットから取ってきたのですが、陸平貝塚がこちらに面した台地の上にあり、こちらはゴルフ場になっています。ゴルフ場の開発で壊されそうになったのですが、学術的に価値があるというので保存されています。

これが貝層の分布を示すマークです。陸平貝塚公園案内図というのがありますが、黄色いところが貝層の分布するところです。この一画に文化財センターという展示施設があります。

現状は、全く公園でして、このように復元住居なども作られていますけれども、これ以外は何もなくて、ただ広い公園になっています。この貝層の分布を見ますと、丸いというか、ここが開いているという解釈をすると馬蹄形というか、大体これが縄紋時代の中期後期あたりの貝塚、貝層の分布の典型的な形であるとも言えます。幸いにも、現状、このように国の史跡にも指定されて保存されているわけです。

先程申しましたように、飯島と佐々木、この二人は二人とも動物学のほうに進んでいました、考古学には進んでいないんです。もともとモース自身が動物学の教授として招聘されたということもあり、そこで教えられた学生たちが動物学のほうに進むというのも当然のことだったと言えますが、考古学の面では、モースの仕事を受け継ぐという人は、残念ながらいなかったようです。

むしろ、その後の考古学者や考古学の研究者たちは、自分がモースの弟子であるとか、あるいはモースの影響を受けたというようなことを言わないというか、嫌うようになっていったようです。

これは、その後、考古学・人類学の指導的な立場にありました坪井正五郎が、次回のお話の主役になる人ですが、その坪井正五郎自身が、今はモースと言われていますが、モールスという言い方をしていましたことがあったようですけれども、「私をモールスの弟子で日本の人類学は同氏から興ったとするのは心外である」というようなことを語っていたことがあります。それから、モースは大森貝塚の発掘の成果として、土器を板に糸で止めて貼り付けて、それを展示するということをしていたわけですが、坪井正五郎は、もうこれは古いんだと言って、モースがした展示を全て取り去ってしまったということもあったようです。

それでは、モースの影響下にあったという人はいないのかというとそうでもなくて、一人は白井光太郎という人がいます。この方は植物学者として名を成しますが、坪井正五郎と同級生で、現在の日本人類学会につながる人類学会という組織を坪井と一緒に作った人です。白井光太郎が、なぜ考古学・人類学に興味を持ったのかというと、ここに書きましたように、モースが大森貝塚の発掘の成果も踏まえて、日本列島の先住民には食人の風習があったということを言いました。それを聞きまして、「果たして吾人の祖先に此の風習ありしや否やを審査せんとの奮發心を」起こしました。我々の先祖が人を食ったりするはずがないじゃないかと思い、それが本当かどうか調べてみようという気持ちを起こして、考古学の研究に一時打ち込んでいます。後に、坪井正五郎の日本人起源論に対して、反対論を展開し、面白い論争もありました。

それから、もう一人、有坂鉛蔵という人です。この人は、最初の弥生土器の発見者として非常に著名な方なのですが、この有坂鉛蔵の遺した言葉の中に「私の考古学は古いが…ひとえにモース先生のおかげである。」と述べているくらいで、モースとのつながりを深く感じていた人であります。その点からすると、もしかすると坪井正五郎とはあまり仲良くなるという関係でもなかつたのかなというふうに想像します。有坂鉛蔵は、後に軍に転じて造兵中将になっており、昭和16年に亡くなっています。

日本人の研究者その他、モースが活躍していた頃に、日本にやって来ていた人で考古学の世界で活躍した外国人たちが何人かいます。

ここでは、縄紋時代に関わる何人かを見てみようと思いますが、大場磐雄さんは、この時期を「外国人啓蒙時代」という呼び方をしています。

ここではそのうちの二人を取り上げますけれども、一人がHeinrich von Sieboldです。前回も名前を出しましたが、江戸時代にやってきた有名なシーボルトの息子です。お父さんに対して、こちらのシーボルトのほうは小シーボルトと言われることがあります。

それから、もう一人はJohn Milneです。この人は、イギリス人の地震学者なのですが、明治9年に日本に招かれまして工部省工学寮に勤めていました。また、工部大学校、今で言うと東京大学工学部のお雇い教師にもなっています。日本にやって来るときに、単身でヨーロッパからアジア大陸を踏査してきましたという探検家でもあり、日本の石器時代研究に寄与するとともに、小樽にある手宮洞窟の彫刻を早くから紹介しています。

さて、小シーボルトですが、モースは、日本での生活のことを記録した『日本その日その日』という本の中で、大森貝塚について「誰かが私より先にそこへ行きはしないか」と気が気じやなかつたというようなことを書いています。その誰かがとは、この小シーボルトのことを意識しているのですね、モースのライバル的な存在ということになりますか。このHeinrich von Sieboldはオーストリア・ハンガリー帝国の公使館の通訳として日本にいました。

また、モースが大森貝塚を発掘した明治10年頃、このシーボルトや、ナウマン象という象がありますが、その命名者であるエドムンド・ナウマンという人たちも実は大森貝塚を調査していました、土器や石器をウィーンの博物館などに贈ったりしていました。

この小シーボルト、Heinrich von Sieboldも確かに大森貝塚の発掘というか調査をしているのですが、きちんとした報告を残しておりません。そういうわけで、シーボルトがどのくらい大森貝塚の仕事に関与したのかというのは、あまりよく分からないです。

しかし、小シーボルトは本を残しております、明治12年に日本語で『考古説略』、もちろん彼が日本語で書いたものではなく、日本語に訳したものですが、『考古説略』という本を出しています。

これは、ヨーロッパにおける考古学の研究法を紹介した本で、モースの“Shell Mounds Of Omori”が考古学で評価される本ではあるんですが、あくまでも一つの遺跡の調査報告書であったということに対して、この『考古説略』のほうは、考古学という学問、これを明確にして考古学の研究対象である遺跡とか遺物、これを外国の例を引用して位置づけていき、土器や石器の製作技術とか用途にも触れており、優れた図が併せて掲載されていて、考古学というのがどんな学問であるのかということを広く紹介したものです。

この書物は非常に広く行き渡っておりまして、これによって考古学という言葉とその概念が広まつていったということが指摘されています。現物を私も見せてもらったことがあります、図書館とかではなく、千葉県市原市の古くからの農家の住宅で、こんなのがあると見せてもらいました。こんなところまでというと、ちょっと言い過ぎかもしれません、この本は広まっていたのかということを感じた覚えがあります。

それからもう一つ、ヨーロッパの考古学者を対象としまして、日本考古学の概略を記した書『Notes on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age』、日本語では『先史・原史時代の日本』と訳していますけれども、そういう本を刊行しています。

これは日本の考古学についての概説です。石器・石製の武器、それから古墳、土器、貝塚、それから

石製の装身具、装飾品とか青銅器、埴輪、こういった章を設けて記述をしています。石器の写真も 8 枚ほど掲げられていて、非常に具体的に内容を示した日本考古学の概説書というわけです。

この小シーボルトは 1895 年に上海領事に登用されたのですが、すぐに辞めまして、1908 年ドイツのフロイデンシュタット城というところで亡くなっています。

もう一人のジョン・ミルン<sup>ジョン・ミルン</sup>です。レジュメの写真の人ですが、右側は日本人の奥さんです。

この人は、先程言いましたようにイギリスの地震学者ですが、遺跡にも興味を持っていた人です。明治 9 年に日本に来まして、工部大学校のお雇い教師などをしたことは先程お話ししました。明治 14 年に “The Stone Age In Japan” 「日本の石器時代」という題目の論文を、イギリス連合國の人類学協会の紀要に発表しています。この中で、ミルンは貝塚や土器に触れているとともに、モースが触れていた大森貝塚の年代についても論じています。

どういう観点から大森貝塚の年代を考えたかと言いますと、東京湾の、当時は江戸湾ですが、その沖積層の堆積の速度を計算していくということをしました。江戸時代の古地図をもとにしまして、東京湾の沖積層の堆積の速度を計算して、大森貝塚は、海岸線から半マイル、大体 800 メートルのところにあった明治 10 年代から 2640 年前のものというような数字を出しました。

もともとの資料として使った江戸時代の地図の資料的な価値ということには問題はあったと思いますけれども、このような考え方から年代を導き出したことは、当時としては非常に優れたことだと評価できるのではないかと思います。

ちなみに、明治 10 年ですから 1877 年になりますが、それから 2640 年前というと、およそ紀元前 800 年、それくらいの年代を出したわけです。

もう一つの手宮洞窟ですが、これは北海道の小樽です。この手宮洞窟は、慶応 2 年（1866 年）に相模国小田原から來ていた石工の長兵衛が発見しました。小樽に何をしに來ていたかというと、ニシン番屋の建設です。今で言うと、出稼ぎでしょうか、ニシン番屋の建設に來ていた石工の長兵衛さんが発見しました。

手宮洞窟の周辺は、小樽軟石と呼ばれる凝灰岩<sup>ぎょうかいがん</sup>の露出しているところで、長兵衛は石工だったので、建設用の石を探していたんですが、偶然、洞窟内の岩壁に様々な文様が刻まれていることを発見しました。

これは文様の様子を図化しているもので、これが実際に刻まれた彫刻です。この彫刻はミルンによって始めて学術的な観察と報告がされています。

その後、北海道開拓使の下で、あるいは今度名前が出てくる渡瀬莊三郎という人によって、次々と調査が行われていて、大正 10 年にこの価値が認められて、国の指定史跡となっています。

突然、歌謡曲の話になりますが、東京ロマンチカの歌った『小樽のひとよ』の歌詞に、塩谷の「古代文字」と出てきます。それくらい小樽の地元の人には、古代文字というような考え方で有名だったものでもあります。

ミルンは、この地方にいた貝塚を残した人たちの手になるもの、つまりアイヌの人たちのものである

という解釈をしました。

そして、一方から他方へずっと読んでいくというような性質のものではなく、全体で、ある事柄の記念に残したものというような解釈もしています。これは、今日の定説とほとんど同じでありました。ところが、そうでない人もいまして、日本人の学者の中にも、トルコ文字だという説を唱えて、文字だということなので文字を読んで「我は部下を率い、大海を渡り戦い、この洞窟に入った」と書いてあるのだという、そんなもっともらしい解釈というか解読をした人もいました。

あるいは、これは全く後世に作られた偽刻であるというような説まで出ていました、真面目に論議されたものもあります。

ミルンは、きちんと図も残しております、非常に科学的な目で現在でも資料として立派に通用するような図としての記録を残しております。

ミルンはその後、明治22年に契約が切れたので奥さんのトネ夫人とともに帰国します。1913年イギリスで亡くなるんですが、ミルンが亡くなつて6年後、トネ夫人は1919年に日本に帰国しまして函館で1925年に亡くなっています。トネ夫人とミルンのお墓が、函館山の麓に残されております。

偽刻説に対しては、実物であると証明するもう一つの手立てが、余市のフゴッペ洞窟でも見つかっております。こちらにフゴッペ洞窟の<sup>おおやまかしわ</sup>覆い屋というか、出入り口の部分ですが、この壁面にこういう彫刻の図化したものが貼つてあるんです。中が真暗いのは当たり前なんんですけど、ライトが反射してうまく写真が撮れないのですが、こんな壁画が残されていました。描いた人たちも、先程の手宮洞窟の遺した人たちと同じではないかと思われるくらい、全く似たようなものが並んでいます。

ところで、大森貝塚ですが、モースが一体どこを掘つたんだということが、いつとき議論されました。というのは、東京のJR京浜東北線、大宮と横浜を結ぶ線ですけれども、その大森駅近くの線路際に2か所、大森貝塚ということを示す石碑が建っています。

一つは、昭和4年に東京の実業家の本山彦一<sup>もとやまひこいち</sup>、毎日新聞の社主だった人政治家でもありました本山彦一が発起人となりまして、実際に大森貝塚の調査に携わった石川千代松・佐々木忠次郎といったモースの弟子たち、そして大山柏<sup>おおやまかしわ</sup>、この人は日清・日露戦争の時の大将の大山巖<sup>おおやまいわお</sup>の息子で、軍隊に入ったんですけども、ヨーロッパに留学をした時に旧石器研究に目覚めてしまい、帰国して考古学のほうに入つてしまつた人ですが、それから人類学者の小金井良精<sup>こがね りょうせい</sup>、先ほどお話をした有坂鉛蔵<sup>ありさかしろうぞう</sup>、こういった人たちが協力しまして、昭和4年に、ここの大森貝塚の石碑を建てました。

もう一つは、昭和5年に、今の大田区山王にこちらが作られるんです。こちらは佐々木忠次郎が、一つ目の石碑を立てる時にも協力した人ですが、その時、どうも違うなと思ったらしく、自分が掘つたのはあそこじゃないということを言いまして、自分の記憶に基づいて、当初に発掘したと考えたところに石碑を建てます。

このレジュメの地図では、下が大田区、上が品川区です。その石碑が、上が品川区の「大森貝塚」、下は大田区の「大森貝塚」という縦長と横長の石碑が二つあるわけです。

大田区側のほうなのですが、これは大森の駅を出ましてすぐのところにあります。レジュメの写真の左側が大田区側の石碑で、史跡大森貝塚の柵があって、入っていきますと、Omori Shell Mound が1877年にモースによって発見されたということを示した台座とともに、この大森貝塚の碑が建っています。

大田区では、大森貝塚が大田区の中にあるということを根拠にしまして、「大田区立郷土博物館」に大森貝塚の展示を行っていますし、また「大田区立郷土博物館」を仲介としまして、モースの故郷でありますアメリカのマサチューセッツ州のセーラムと大田区とが姉妹都市を結んでいます。大森貝塚が結ぶ縁ということですね。

どうも、こっちは違うのではないかという考えが結構あったんですけれども、発掘の当事者である佐々木忠次郎が、自分が掘ったのはここだということを主張したので、外すことのできない指摘にもなっています。実際に、この石碑の周りを発掘しても、さしたる成果は上がらなかつたというのも、また事実です。

このレジュメも、前回も記しましたけれども、残されているスケッチです。品川区のほうでは、大森貝塚の遺跡の保存、それから周辺の整備というものを目指して、モースの調査から 107 年目の 1984 年に発掘調査をしました。1164 m<sup>2</sup>くらいを買収して発掘調査をしました。昭和 59 年の 6 月 6 日から 12 日まで発掘調査をしました。

ちょうど、このスケッチに残された図のあたりだろうと考えるところを調査しまして、調査面積は 50 m<sup>2</sup>という狭いところなんですが、良好な貝層も発見されましたし、しかも貝層の中から縄紋時代の後期から晩期という、ちょうどモースが発掘報告書の図に残した頃の土器片が多数出土しました。

貝層自体も縄文時代の晩期に形成されたということが確認されましたし、また、この線路際の貝層からは後期の土器を純粹に出土するという貝層もありまして、こちらの品川区のほうがモースの報告書に掲載されている発掘地点だろうということになったわけです。

ですから、どちらということになると、軍配は品川区のほうに上がつたというふうに言っていいんでしょう。

品川区では、この発掘地点を含めて「大森貝塚遺跡庭園」として整備しています。これはその庭園の入口ですが、反対側にも同じようなモニュメントというのでしょうか、土器がのっていたり、これはなんのイメージですか、勾玉みたいなイメージですかね。下のほうにあるこれは、発掘をすると土層の区別をするその時に線を引くわけなんですが、多分そのイメージなんでしょうね。

貝塚と貝塚の石碑とそれから電車の関係で、2 枚の合成ですけれど、実際こんな近い所にあります。東京駅のほうから行きますと、大森の駅に入る少し手前のところです。ただ、この横を通る時は、まだ電車のスピードが相当出ている時ですので、気を付けないと見落としかねないというところでもあります。

庭園の整備状況は、このようになっていまして、ここが入口として、ここが広場、何か廃墟というイメージをあちこちに醸し出そうとしている雰囲気が見えます。先程の石碑はこことこに立っています。ここが線路です。ここに大森貝塚の横長の石碑が立っています。そしてこの辺の数字の書いてあるところに貝層が残っております。結構よい子どもの遊び場になるような感じです。

一つ前の真ん中に丸い所がありますが、真夏に行きますとここから水が出ていて、噴水までは高くないですが、子どもがこの中に入って水浴びするのにちょうどいいくらいの、水の強さもこんなもの

ですね。それからこの構造物の意味しているところがよく解らないですけれども、多分洞窟を意味しているようなところと横の壁まですけど遺跡の壁みたいな、発掘をしたトレンチの壁みたいなイメージを作り出しています。

それから、ここにモースさんがおりまして、有名なモースの像です。実際に発掘をしたわけではなくて、一種のモニュメントとして残していますが、遺跡における土層の堆積状態というのをイメージしたようなものになっています。

それから貝層の保存の部分なのですけれども、こういう<sup>おお</sup>覆い屋、シェルでシェルター作ったって、洒落にもなるのかなということですけれども、この中に横に貝層の模式というか、はぎ取りの標本の模式的なものを出していました。

貝塚というと、塚という言葉から、貝がうず高く積み上がっているイメージをお持ちかもしれません、実際に掘ってみると、そんなに堆積のある貝塚は多くなくて、こんなものなんですね。

貝層は、名前を付けています、貝だけが純粋に堆積しているところを純貝層と呼び、そして貝と土の混じり具合によって、<sup>こんど</sup>混土貝層、土の混じった貝層、それから<sup>こんかい</sup>混貝土層、貝の混じった土層と、貝の混じり具合によって分けられているのですが、ここですと、混土貝層というくらいです。

もちろん、純粋の貝層、純貝層というのもあります、ただ、こういう平地の貝層というよりも、むしろ斜面に形成された貝塚というのに純貝層として残ったりしています。

これは貝層の分布していたところを、窪めて、ここに貝層があったということを示しています、この子なかなかどいてくれなかったので、このままなんですが（笑）。

ここにある白いこれもそうなんですけど、この角のところですね、これは貝ではなくて白い小石を埋めてありました。貝があるんだよというイメージを作っているのだと思うんですけど、貝がこの範囲に分布していたということを示している、こういうのが何ヶ所か、斜面近くにあります。

それからこれもイメージなのですが、先程の洞窟みたいなところの奥がこのようなのでして、壁がこんなイメージであるという線が引いてありますし、ここが座れるんですけども、ちょっと座る気になれないような、あまりも廃墟すぎるんじゃないかなとも思います。

ここは確かにトイレだったと思うのですけど、トイレの周りの装飾もですね、土器の模様を付けたりしています。これは公園の床なのですが、なんでこうなっているのかよく分からなかったのですけれど、床ですから滑るのを防止するのかなと思いますが、とにかくこんな文様が付いていました。

縄紋のつもりかなと思ったのですが、ちょっと専門的なことを言いますと、これは縄紋じゃなくて撫糸文というものです、縄紋ではないのです。ついケチをつけてしまう悪い習性があります（笑）。こういうふうに、大森貝塚については、決着がついていて、現在は、公園として保存されています。

なお、大森貝塚の出土物そのものは、「東京大学総合研究博物館」に所蔵されています、出土した資料は全て重要文化財に指定されています。それから、品川区も大田区も、両方、大森貝塚の展示はしています、大田区は相変わらず自分のところもそうなんだと言っていました、それはそれでいいでしょうね。

展示コーナーもあります。品川区の「品川歴史館」は、先程の大森貝塚から 500 メートルくらい北に行ったところにあります、そこと大森貝塚が一緒になって大森貝塚遺跡庭園となっています。

大森貝塚という名前が誤解を招くもとになったのかと思うんです。普通、遺跡の名前というのは、その土地の字名とか小字名とかを付けるわけなんです。その例でいうと、ここは、大森じゃなくて大井かなと、又は鹿島谷という字名のところなんです。

多分モースが調査していた頃というのは、新橋から汽車に乗って大森まで来て、そこから貝塚を行ったということになっています。というところから、大森から行った貝塚なので、いつの間にか大森貝塚になったんじゃないかというふうに思います。現在の遺跡の名前の付け方からすると、本当は大森貝塚じゃなかったはずだということです。

ちなみに、遺跡の名前というのは、次の向ヶ岡もそうなんですけれども、今、言いましたように、大体、小字名とか字名とかを付けるのですが、それでもって足りなくなることがあるんですね、この頃は番号を付けるのです。

典型的なのは、東京の八王子の多摩ニュータウン地区です。あそこはナンバー何とかと番号を付けて、楽しくもなんともないなという感じがしますし、それから一つの字名、字の中に何か所も遺跡がある場合には、その字名を取って、仮に多賀城 1 遺跡とか多賀城 2 遺跡とかいう番号を付けて名前にするということがよくされています。

大森貝塚はそういうわけで決着がついたのですが、日本の考古学の研究史の上で、もう一つハッキリしていない遺跡というのがあります。

それがこの向ヶ岡貝塚です。<sup>むこうがおか</sup>向ヶ岡貝塚、つまり最初の弥生土器が発見された遺跡・場所はどこかということです。それは現在の東京都文京区弥生というところにある遺跡で、もともと弥生時代というのも、弥生という、その土地の地名から付けられているわけです。

弥生というのは、そもそも 3 月のことですけれども、なぜ 3 月が時代の名前になったのかということですが、現在の文京区弥生のあたりに水戸藩の屋敷がありまして、そこに幕末の水戸藩主の斎昭が「向ヶ岡碑」の石碑を残しているんですが、その中に弥生という言葉が出てきていて、その辺りから、こちらあたりを向ヶ岡弥生町と言うようになったということです。

その遺跡を弥生町遺跡と言ったり、しかし、どうも明治時代の人は向ヶ岡貝塚という言い方をしていたようだというんですが、それがいったいどこなのか。この図が第 1 号の弥生土器で、口縁部が欠けていますが、本当は開いていたんでしょう。壺形土器といわれているものです。

現在では、これは弥生時代の一番最後に近い頃、弥生時代の後期と分類される時期の土器とされていますが、これを発見したのが、何度か名前の出てきた有坂鉛蔵という人です。

有坂鉛蔵は、モースの弟子の石川千代松という動物学者の義理の弟にあたりまして、そんな関係からモースのもとにも出入りしておりました。

大森貝塚の発掘、それから陸平貝塚の発掘にも影響されまして「郊外あたりをふらついたらば何か採集することができるだろう」というような思いを持って、「西ヶ原、また上野公園のうしろの方など、人里離れたところを歩き回って」みて遺跡を見つけて歩いていた。上野公園のあたりも、人里離れたところだと言っています、今では考えられないことですけれども。

明治 16 年の夏、有坂が 15 歳になった頃ですが、その頃には向ヶ岡貝塚を見つけていたようで、貝塚から、この土器を採集していたようです。

この土器について、坪井正五郎に紹介するわけですが、明治 17 年に義理の兄の石川千代松の紹介で、坪井正五郎と白井光太郎に会っています。

白井光太郎もこの貝塚があることを知っています。早速、行ってみようと、明治 17 年 3 月 2 日に有坂・白井・坪井の 3 人で、有坂と白井が見つけていた貝塚に出掛けました。

そこで、この時に、有坂がこの土器を見つけたとされているんですが、それが本当なのかというと、ちょっと疑問です。有坂はこの土器を見つけた時のことを「貝塚の表面に壺の口が貝の中から出ているのを見いだし、これを抜き出した」と言っています。これがレジュメの写真にある第 1 号の弥生土器です。その後「しばらく一人で賛観して」いた。一人でこれを持って見ていて、その後、これを坪井正五郎に預けたとしています。

だから、3 人で出かけた時に、この土器を見つけたのではなくて、その前に、有坂は見つけていたらしく、そして、この土器を見つけた貝塚に 3 人で行ってみて、その後、土器を坪井正五郎に預けたと、坪井正五郎は人類学教室の人ですので、専門家だということで、そちらに預けたということです。

坪井は、このことを明治 22 年に『東洋学芸雑誌』という雑誌に「帝国大学の隣地に貝塚の跡<sup>こんせき</sup>あり」という題で発表しています。これには 3 人で出かけたと考えられる貝塚のスケッチが入れられています。これも有名なスケッチなのですが、台地はこれで、向こうに丘があって、根津の谷<sup>ねざ</sup>という谷になっていまして、向こう側に上野の丘の森があります。ここが貝塚なのでしょう、ステッキでつづいているそんな人が表されています。

現在だと、ここが上野で、こちらが本郷の台地になり、その間に不忍池があるんですが、この図には不忍池は見えません。だから、不忍池は、多分この丘の陰になるのではと、この図で想像ができます。

先程の土器は、いつの頃からか弥生土器と呼ばれるようになっていくわけです。有坂鉱藏の記述の中には「雪のように白く積んだ貝殻の中から半ば露出していたこの土器を抜き出した」とあります。

そういう記述からしますと、この貝塚は、弥生土器を含む貝層がうず高くあり、雪のように白く積んだ貝殻の中ということで、ちゃんとした貝塚で、しかも先程の記述からすると純貝層的な貝層があった弥生時代の貝塚であるということが考えられるわけです。

有坂鉱藏が、この貝塚の場所を、この一つ前の記述とは別に、有坂自身が表現しています「大学の裏門の道を距てた通りの向かい側で根津の町を眼下に見る岡」、続けて言ってしまいますが、「裏門の筋向いには陸軍の射的場<sup>ひきじ</sup>があってその西北の方」、「風景の極めてよいところで上野の森や不忍池を望んでいる」としています。

また、その一方では「弥生町の街が建って遺跡の正確な位置はわかりません」とも述べています。

これは現在の地図でして、大学の裏門というのは、多分ここのことです。陸軍の射的場<sup>ひきじ</sup>があって、射的場の跡<sup>あと</sup>というのはこの辺です。この角のところに「弥生式土器発掘ゆかりの地」という石碑が建っていました。ここは土器の採集地点とはあまり関係ないんですけども、ゆかりの地だから勘弁として、この一帯が弥生の貝塚のあったところだという意識がみられます。

今まで何人もの人が、有坂の弥生の貝塚はどこかということを探ってきてています。

レジュメに地図がありますが、この②番が「弥生式土器発掘ゆかりの地」の石碑が建っているところであり、①番のところは、東京大学の農学部の裏門のところで、「ちいさい秋見つけた」とか「りんごの唄」などを作詞したサトウハチローの家のあったところです。慶應大学の江坂輝彌さんとか明治大学の杉原荘介さんが、ここだと推定したところです。その付近に確かに貝塚があり、その貝塚があるということから、弥生土器の発見の推定地の一つと今でもされています。しかし、サトウハチローの家のあたりの床下までもぐりこんで探ったということなんですけれども、残念ながら、貝塚があり、土器も採集されたんだけれども、発見された土器は縄紋時代後期のものばかりで、弥生時代のものではなく、貝塚はあるけれども、縄紋の貝塚です。実際、この時に採集されたものが「東京大学総合研究博物館」に残されていますけれども、確かに縄紋の後期の土器ばかりです。

それから、②番はゆかりの地というだけであまり意味はないのですが、斎藤忠先生がここじゃないかということで建てたものです。

③番ですが、これは建築史学者の太田博太郎さんなどの比定地です。これを見ますと、ここに丘があるんですが、実際行ってみると、ここから不忍池は見えません。おそらく、ここは坪井正五郎の残したスケッチの場所だろうと考えられるんです。有力な地点でありまして、ここで中山平次郎という方が弥生土器2点を採集しており、弥生の遺跡があるのは事実です。それと、先程の坪井正五郎の残したスケッチの場所にはほぼ近いです。

1974年の春に東京大学の浅野地区、なぜ浅野地区かというと、浅野家の屋敷跡があったところなんです。東京大学の敷地というと前田家の敷地跡というのが有名ですけれども、前田家のほかに水戸家の屋敷跡も、それから浅野家の屋敷跡も取り込まれていて、ここは浅野家の屋敷跡で浅野地区と呼ばれていました。工学部の原子力関係の施設などがあったところです。

この浅野地区と呼ばれたところで1974年の春に大風が吹いて、木が横に倒れてしまった。木が倒れるとななると下の土を噛んで上がってきますが、その上がってきた木の根元に、土器片が出てきまして、この土器片を地元の小学生が拾い、その小学生の知っている考古学の関係者に持ち込んだのです。

その方から、当時の東京大学の文学部考古学研究室の渡辺貞幸助手、現在の島根県の「出雲弥生の森博物館」の館長さんですが、その方のもとに情報が入りました。

折から、この浅野地区で工学部の新しい建物を建てるという計画が持ち上がっていまして、新しい建物を作るための事前調査という意味ではないのですが、何らかの調査が必要だろうということになって、早速、翌年1975年の2月から3月にかけてと7月にかけての合計40日間、文学部の佐藤達夫助教授の指導の下で、理学部の人類学教室と考古学研究室の共同調査ということで発掘をしました。

この時、私はちょうど大学院生として、大学の研究室で発掘をするというと、毎年8月から9月にかけて学生の実習施設のある北海道の北見市の常呂、カーリングで有名な常呂に実習施設があって、夏はそこで発掘をしていたんですけども、夏だけじゃなくて冬も暇だからどこか発掘したいねということを院生の間で話していたところにこの話があったのですから、私も飛びついて参加しました。

調査地全体が浅野地区、大名屋敷跡ということでしたが、私たちが調査したところは水戸家の関係の大名屋敷跡だったので、盛り土があつたり、それから、いくつも攬乱壙かくらんこうというか、江戸時代に開けられ

た穴がたくさんありますて、やりにくいなと思っていたんですけども、この頃は、<sup>うわぐすり</sup> 索のついた磁器の欠片<sup>かけら</sup>が出てくると、これは攪乱だと、考古学の対象外だということでどんどん飛ばしていったんです。飛ばしていってその下のほうを掘るということを目的みたいにしていたんです、今では考えられませんが。

余談ですが、考古学の発掘調査というものが、今では江戸時代はもちろん明治時代も、さらに少なくとも 1945 年くらいの段階までの人々の行動の跡というのは、全部考古学的な調査の対象となっています。わたしたちのこの調査は 1975 年のことですから、ここ 10 年というか、20 年、30 年の間の考古学の対象の変化は、ものすごいところがあるわけです。おかげで遺跡の数がものすごく増えたということもありますけれども。

出てきた穴も、大名家の穴で、これは攪乱だね、なんて言いながら掘っていたんですけども、そもそもいかないところがありますて、レジュメの右側が発掘したところの全体図です。こういう穴がありますけれども、これみんな江戸時代の穴なんです。特にこのような、中に一つ、二つ、別な穴があるというのは、植木を植えた跡か柱を立てた跡だろうと思います。これは明らかに植木なんですね、木を植えた跡です。そうした中で溝が二つ出てきます。ここに一つと、ここに幅の広い断面で見ますと、ちょうど台形の逆、逆台形といいますか、その溝と、それからもう一つ断面が V 字形をしている溝が出てきています。断面がこの V 字形と逆台形の 2 本です。V 字形の溝を壊して、この台形の溝が作られています。そして、この逆台形の溝の底とそれから V 字型の溝の埋土の上面から弥生町期<sup>やよいちょうき</sup>の土器が出ています。

弥生町期<sup>やよいちょうき</sup>というのは先程の第 1 号の弥生土器の時期です。貝層は、ちょっと見えにくいですが、ここに貝層の表面と混土貝層というものでしょうか、貝層があります。これは V 字形の溝の底になって、この V 字溝の埋土、ここが V 字溝ですから、その上に堆積していて、この逆台形の溝の中に流れ込んでいます。つまり、この V 字溝が埋まってから貝層が堆積して、その後、この逆台形の溝を作つて上から流れ込んできています。そういう関係になります。この貝層の中から、先程も言いましたように、弥生町期の土器が出ていますので、貝層もこの逆台形の溝も、弥生町期、弥生時代後期のものであると考えられます。

この調査の時に、佐藤達夫先生が貝塚を全部調査したいということで、この貝を全部取つて持つて来て分析して調べようと言われたんですが、お止めしました、というのは、これは弥生町期の貝塚ということが分かったので、東京都内にそういうような時期の貝層がどれだけあるんだと正確には把握しておりませんけれども、直感で、とにかくこれは残さなければならぬと思ったのです。

残しておけば、後で調査できますから、今、我々だけの関心で掘つてはならないという思いをもつて、佐藤先生をお止めしました。逆らうことのできない先生なんですけれども、この時だけは逆らいまして(笑)、残してもらいました。先生はわかってくださって、これは残しておきましょうということで、こういう写真が、その後に撮られて、このまま埋められています。

多分、東京大学の構内で遺跡として発掘をした一番最初の事例じゃないかと思うんです。この後、数年経つてから、東京大学の構内で、前田家の屋敷跡ということで、時代の調査をするなど、それに伴つて江戸時代の考古学というのが非常に進んだという側面はありますけれども、これはその前の段階の画期的だと思っていい調査だろうと思います。

毎日どこかでお昼ご飯を食べるわけすけれども、汚い格好で東大の構内を歩きまして、東大の構内

には結構あちこち食堂があるんです。一番お金のある医学部の持っている食堂なんてすごくきれいなんですが、そこには、さすがにあの恰好では入って行けなくて、そのくせ、病院の食堂は平気で入って行きました。だいぶいろんな目で見られたのではないかと思いますけれども（笑）。

この発掘調査が、私の指導教官だった佐藤達夫先生との、最後の発掘になりました。レジュメに写真がありますが、出てきた土器がこんなものです。その他の遺物として、<sup>といし</sup>砥石それから<sup>しゃくこつ</sup>灼骨、灼骨はシカの左の腰骨と鳥管骨が出て来てまして、焦がした跡があるので、占いに使った灼骨のようです。それから、砥石は玉磨き用の砥石でして、ここで何らかの玉を作る細工がされていた可能性もあります。

貝層から出た貝は、ほとんどがマガキで 88%を占めました。それから、その他に、ウネナシトマヤガイ 4.4%，オキシジミ 2.8%，ウミニナ 1.7%，アカニシ 1%，オオタニシ 0.9%，ハマグリ 0.6%で、ニホンジカの骨も見られたという自然遺物の状況でした。

土器は弥生町式以外のものは、全く出て来ておりません。だから、弥生時代に関しては、この遺跡は弥生町期の単純遺跡といってよいようです。ただし、こっちのほうから縄紋土器が何点か出ています、それもこのエリアでは出ないような縄紋時代晚期の土器片がばらばら出てくるんです。

これは、何で、遺構もないし、土器片だけがばらばら出てくるのか。いや、ばらばらと言うほどたくさんではなく、パラッパラ（笑）と出てきて、何でだろうということを考えますと、先程植木があったと言いましたが、この植木のせいじゃないかと。植木を、江戸時代に、埼玉県の川口の安行<sup>あんぎょう</sup>という植木の産地から持って来ているという記録があるんです。安行というところは、縄紋時代晚期の遺跡がたくさんあるところで、そんな関係もあるんじゃないかなと、これは想像なんですが、遺構と関係のない土器もありました。

そういうわけで、貝層からは弥生町期だけのもの、つまり、これは有坂鉛蔵が発見した第 1 号の弥生土器の壺と同じ時期の遺跡であるということが、これで明らかになっています。

そのころ、まだ報告書にカラー写真を使うということが予算上できないころだったので、コロタイプの写真を残しています。

レジュメの写真の、この星印のところが発掘地点ですが、私たち発掘の当事者としては、これで有坂鉛蔵の弥生土器の発見地はもう決着がついたという思いを持ちました。特に発掘を指導なされた佐藤達夫先生は、この貝塚こそが有坂鉛蔵の発見地ではないかというふうに考えられました。

今までの定説では、森本六爾という方が考証しているんですけども、昭和 17 年 3 月 2 日に坪井正五郎、白井光太郎と 3 人で連れ立って向ヶ岡貝塚に出かけて行って、有坂紹蔵が土器を発見したということになっていたのですが、先程言ったように有坂紹蔵は、発掘してしばらく自分の家に置いて賞翫していたということを言っているのです。

有坂自身の懐旧談にちょっと違うところがあるのです。有坂は昭和 4 年の段階までは、自分でも、坪井と白井と 3 人で行って見つけたんだと言っていましたが、昭和 10 年になってからの記録では、実はそうではなく、「17 年の始め」、3 月じゃなくともっと前、3 月 2 日より前に行っているということを言っています。

もし 3 月 2 日に 3 人で行って一緒に見つけたんだとすれば、有坂が言うのではなくて、坪井正五郎がそのことを言わないはずがないだろうと、だから、坪井正五郎が一緒に行った時に見つけたんじゃないのだろうと、つまり弥生土器の発見地は坪井のスケッチの場所ではないというふうに考えたわけです。

実際、先程のサトウハチローの家のところに貝塚があったということを申し上げましたけれども、これが向ヶ岡の崖線なんです、この崖に沿って点々と貝塚があったということは、どうも間違いないことで、弥生の貝塚というのはここだろうと。

そして、モースの弟子ということを自認していた有坂鉛蔵と、それに対してモースとは関係ないという坪井正五郎、この二人の関係がどうだったのかわかりませんが、実は仲が悪かったという人もいるけれど、解釈の問題です。ただ、鳥居龍蔵とりいりゅうぞうという坪井正五郎の弟子が、「有坂さんは坪井さんが得意な時分にはでできませんでした」というようなことを言っているようで、仲が悪いというよりも、あんまり仲が良い存在ではなかったということも、間違いではないかもしれません。

佐藤先生は、「根津の街を眼下に見、不忍池を望む弥生式の貝塚は今回発掘の地点をおいて他にはない」と断言されています。もっと詳しい論考がされるはずだったんですが、残念ながらこの調査終了後の昭和52年に佐藤先生は脳腫瘍のために51歳で亡くなられまして、発掘報告書も、残された渡辺助手を中心にして作り上げられました。ただ渡辺助手もこの直後に島根大学に転勤されましたので、最後の後片付けは私がいたしました。

確かに、坪井と有坂は仲が悪かったかもしれませんけれども、それは後のことでのこと、出会った最初から仲が悪かったというのはちょっと無理があるかなと、最初から仲が悪くて坪井が有坂に嘘を教えたんだという佐藤先生の解釈はちょっと無理があるかなとも思います。

残念ながら、佐藤先生はもう何も反論できないわけですから、発掘に携わった私を含めた全員の認識は、当時の理学部の人類学教室の教授で佐藤先生とともに発掘の担当者でもありました渡辺直経先生わたなべなおつねという人類学者が、報告書の『向ヶ岡貝塚』と題する報告書の序文に書いてくれています。ちょっと長いのですが読んでみます。

「なお、本報告書において遺跡名を『向ヶ岡貝塚』としたことについて一言触れなければならない。もともとこの発掘調査は、単に東京大学構内から遺跡が発見されたという理由によって実施されたのではない。それが向ヶ岡貝塚の所在を明らかにするのに役立つかもしれぬという学史的意義を第一義として行われたのである。その結果、本報告書に述べる通り、この遺跡が弥生時代の貝塚であることが確認され、しかも明治17年発見の壺形土器と同型式の土器が数個体分出土した。これによって従来不確かな記録や僅かばかりの貝殻や土器片の散布によって、壺形土器を出土した向ヶ岡遺跡の位置が憶測されていたのとはまさに事情が一変したのである。即ち、壺形土器と同時代の貝塚が発掘地域の付近にある広がりを持って存在したことは今や確実となり、誰しもそれが向ヶ岡貝塚であろうと考えるのが自然である。断定はできないまでも、その公算は極めて大きいといわねばならない。」と書いてくださいました。私たち発掘当事者の思いはそのとおりです。

つまり、向ヶ岡と呼ばれる土地は忍ヶ岡しのぶがおかに対する向ヶ岡であり、当時の一帯の通称だったわけです。向ヶ岡にある貝塚で、弥生の土器が発見された。向ヶ岡と呼ばれるところに貝塚が実際にあって、その貝塚からは明治17年の壺形土器と全く同時期の遺物が出土した、これが事実です。それも発掘調査を通じて分かったという事実、これを重要視したいところです。

なお、この遺跡は「弥生2丁目貝塚」という名前で、国の史跡に指定されております。東京大学の構内で保存されています。

これを史跡として申請する時も「向ヶ岡貝塚」という名称で申請したんですが、しかし、当時の史跡の指定などに関わる文化財保護審議会というところの専門委員の中に、向ヶ岡貝塚とは断定できないと

主張する人がいて、無難なところを取って現在の地名である弥生 2 丁目と、身も蓋もないつまらない名前が付けられてしまったという事情があります。

その後、東京大学のこの一帯で東京大学埋蔵文化財調査室という組織により、数か所発掘調査がされています。これは建物の新築に際しての事前調査ということで行われていますが、この調査を担当したのが原祐一さんという方なのですが、その方が一生懸命この向ヶ岡貝塚の所在について、いろいろ探っています。全体的な調査を通じて、このあたり一帯に弥生時代の遺跡が広がっているということは明らかになっていきました。しかし貝塚はここにしかないんです。

その他、この有坂鉛蔵の候補地として、原祐一さんが考えるところというのを何か所か番号を付けたところがありまして、レジュメに地図がありますが、①番が坪井正五郎たちの描いた絵のところです。この網掛けのところが弥生時代の遺構の広がりがあるところのようですけれども、原さんはどうもこっちの方が有力だと考えているようですが、でも、勝ったなと思うのは、こっちには貝塚がなく、こっちには貝塚があるということで、それが一番強いところでしょうか。

なお、原さんは、今も精力的に調査を進めています。

ここに溝があったというのは、その溝の性格なのですが、弥生時代の集落というのは大きな集落というのは大抵、溝で囲まれているのです。かんこう環濠集落という言い方をしますけれども、なんで溝を作ったのかというと、外敵から守るためという解釈もされていますけれども、その集落の溝がここにあるんだろうと。だから、もっと広がりをもった溝で囲まれた区画があってもいいはずだなと思いますが、調査されていないのでわかりません。

しかし、弥生時代の人の住居跡も出ています。ほうけいしゅうこうぼ方形周溝墓という形の弥生人のお墓も見つかっています。だからこの一帯が弥生人の生活の場であることは、間違いないというのが現状であります。私はここだと、何回も言いますけれども、ここで間違いないというふうに考えております。

この辺一帯に貝塚があって、こちらには貝塚がないですから、そこが一番強いところかなというふうに思います。

最後にちょっと私の青春の思い出を語ってしまいましたけれども、今日はこれで終わりとさせていただきます。

(拍手)

司会：鷹野館長、ありがとうございました。ちょうどお時間となりますので、第4回「モースの影響 大森貝塚はどこか」のお話は、これにて終了させていただきます。

次回のご案内です。2週間後の7月23日に、今度は坪井正五郎と石器時代の住民論争についてのお話がございます。第6回目は、お盆の直前ですが、8月13日に縄紋土器研究の進展と題しまして、お話をいただきます。

またお会いできることを祈っております。

今日はどうも最後までありがとうございました。

(拍手)